

2 麦 類

(1) 要 旨

ア 小麦（子実用）

作付面積は22万9,600haで、前年産に比べ2,200ha（1％）減少した。

収穫量は103万1,000 t で、前年産並みとなった（表2－1、2－2）。

イ 二条大麦（子実用）

作付面積は4万300haで、前年産並みとなった。

収穫量は15万2,900 t で、前年産に比べ3万3,800 t （28％）増加した（表2－1、2－2）。

ウ 六条大麦（子実用）

作付面積は1万8,600haで、前年産に比べ900ha（5％）減少した。

収穫量は5万9,000 t で、前年産に比べ4,900 t （9％）増加した（表2－1、2－2）。

エ はだか麦（子実用）

作付面積は5,160haで、前年産に比べ270ha（5％）減少した。

収穫量は1万6,500 t で、前年産に比べ4,100 t （33％）増加した（表2－1、2－2）。

表 2－1 令和 7 年産麦類（子実用）の作付面積、10 a 当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積	10 a 当 た り 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量		収 穫 量		10a当たり 平均収量 対 比	10a当たり 平均収量
				対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比		
	ha	kg	t	ha	%	kg	%	t	%	%	kg
全 国											
小 麦	229,600	449	1,031,000	△ 2,200	99	5	101	2,000	100	98	458
二条大麦	40,300	379	152,900	200	100	82	128	33,800	128	102	372
六条大麦	18,600	317	59,000	△ 900	95	40	114	4,900	109	103	308
はだか麦	5,160	320	16,500	△ 270	95	92	140	4,100	133	107	299
北 海 道											
小 麦	133,400	504	671,900	1,400	101	△ 37	93	△ 42,300	94	96	525
二条大麦	1,760	298	5,250	80	105	△ 104	74	△ 1,500	78	74	403
六条大麦	21	405	85	1	105	△ 16	96	1	101	100	403
はだか麦	57	270	154	2	104	△ 43	86	△ 18	90	108	251
都 府 県											
小 麦	96,200	373	358,800	△ 3,600	96	58	118	44,100	114	101	368
二条大麦	38,500	384	147,700	100	100	91	131	35,300	131	104	371
六条大麦	18,600	317	58,900	△ 900	95	40	114	4,900	109	103	308
はだか麦	5,100	322	16,400	△ 270	95	95	142	4,200	134	107	300

注：1 子実用とは、主に食用に供すること（子実生産）を目的とするものをいう。
2 「（参考）10 a 当たり平均収量対比」とは、10 a 当たり平均収量（原則として前年産を起点とした過去 7 か年のうち、最高及び最低を除いた 5 か年の平均値をいう。ただし、過去 7 か年全ての 10 a 当たり収量が確保できない場合は、6 か年又は 5 か年の最高及び最低を除いた平均とし、4 か年又は 3 か年の場合は、単純平均である。）に対する当年産の 10 a 当たり収量の比率である。なお、過去 7 か年のうち、3 か年分の 10 a 当たり収量が確保できない場合は、作成していない（以下各統計表において同じ。）。

表 2－2 令和 7 年産麦類（子実用）の作付面積、10 a 当たり収量及び収穫量（全国農業地域別）

全農地	国 業 城	小 麦				二 条 大 麦				六 条 大 麦				は だ か 麦			
		作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平均 収 対	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平均 収 対	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平均 収 対	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平均 収 対
		ha	kg	t	%	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%
全 国		229,600	449	1,031,000	98	40,300	379	152,900	102	18,600	317	59,000	103	5,160	320	16,500	107
北 海 道		133,400	504	671,900	96	1,760	298	5,250	74	21	405	85	100	57	270	154	108
都 府 県		96,200	373	358,800	101	38,500	384	147,700	104	18,600	317	58,900	103	5,100	322	16,400	107
東 北		6,530	288	18,800	110	41	300	123	118	1,660	336	5,570	99	0	167	1	nc
北 陸		599	274	1,640	127	7	371	26	863	10,300	318	32,800	105	x	100	x	50
關 東・東 山		21,000	368	77,300	103	11,400	373	42,500	103	4,130	269	11,100	91	308	268	826	96
東 海		17,400	428	74,400	108	42	281	118	124	383	300	1,150	113	19	258	49	98
近 畿		8,840	335	29,600	107	x	393	x	119	x	405	x	117	x	282	x	114
中 国		3,050	321	9,800	91	3,210	333	10,700	97	38	163	62	77	490	292	1,430	110
四 国		2,630	388	10,200	104	356	427	1,520	131	2	133	2	69	2,320	342	7,940	106
九 州		36,100	380	137,100	96	23,300	395	92,100	105	60	245	147	217	1,700	318	5,400	104
沖 縄		12	117	14	89	2	50	1	62	－	－	－	nc	－	－	－	nc

注： 全国農業地域別（都府県を除く。）の 10 a 当たり平均収量は、各都府県の 10 a 当たり平均収量に当年産の作付面積を乗じて求めた収穫量（平均収穫量）を全国農業地域別に積み上げ、当年産の全国農業地域別作付面積で除して算出している（以下各統計表において同じ。）。

(2) 解 説

ア 小麦（子実用）

(ア) 作付面積

作付面積は22万9,600haで、前年産に比べ2,200ha（1％）減少した。

このうち、北海道は13万3,400haで、前年産に比べ1,400ha（1％）増加した。

また、都府県は9万6,200haで、前年産に比べ3,600ha（4％）減少した（表2－1、2－2、図2－1）。

(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は449kgで、前年産を5 kg（1％）上回った。

これは、主に北海道において、高温及び少雨により細麦傾向となり前年産を下回ったものの、九州において、湿害等で作柄が悪かった前年産を上回ったためである。

このうち、北海道は504kgで、前年産を37kg（7％）下回った。

また、都府県は373kgで、前年産を58kg（18％）上回った。

なお、10 a 当たり平均収量対比は98％となった（表2－1、2－2、図2－1）。

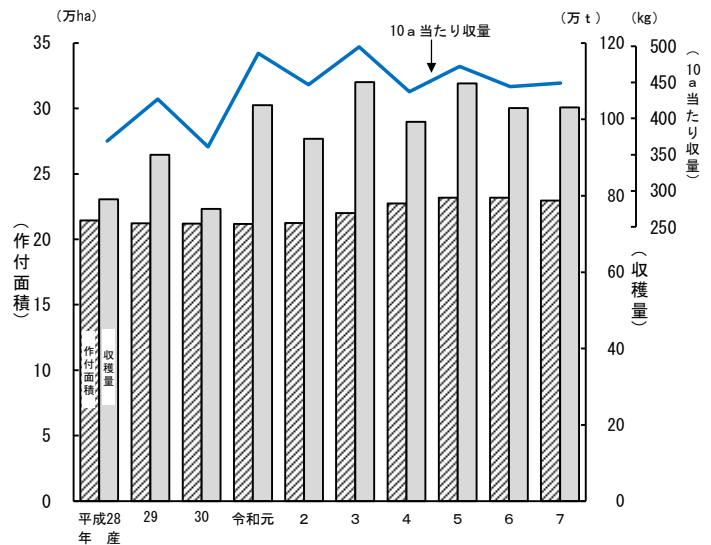
(ウ) 収穫量

収穫量は103万1,000 t で、前年産並みとなった。

このうち、北海道は67万1,900 t で、前年産に比べ4万2,300 t（6％）減少した。

また、都府県は35万8,800 t で、前年産に比べ4万4,100 t（14％）増加した（表2－1、2－2、図2－1）。

図2－1 小麦（子実用）の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移（全国）



イ 二条大麦（子実用）

(ア) 作付面積

作付面積は4万300haで、前年産並みとなった（表2-1、2-2、図2-2）。

(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は379kgで、前年産を82kg（28%）上回った。

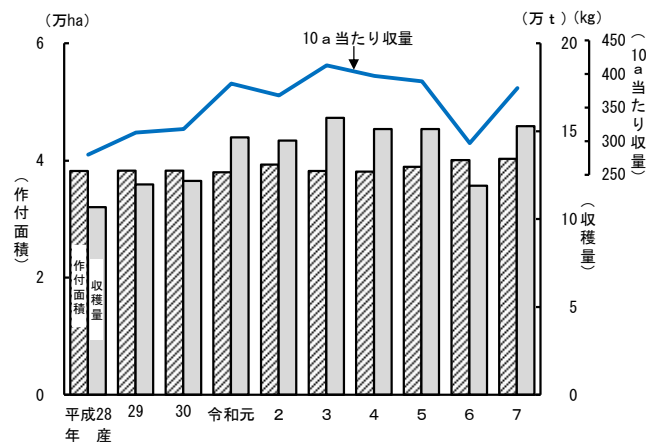
これは、主に九州において、おおむね天候に恵まれ、生育が順調に推移したことから、湿害等で作柄が悪かった前年産を上回ったためである。

なお、10a当たり平均収量対比は102%となった（表2-1、2-2、図2-2）。

(ウ) 収穫量

収穫量は15万2,900tで、前年産に比べ3万3,800t（28%）増加した（表2-1、2-2、図2-2）。

図2-2 二条大麦（子実用）の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



ウ 六条大麦（子実用）

(ア) 作付面積

作付面積は1万8,600haで、前年産に比べ900ha（5%）減少した（表2-1、2-2、図2-3）。

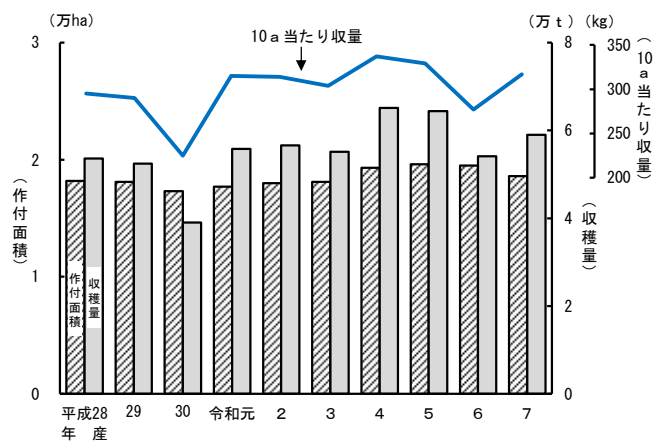
(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は317kgで、前年産を40kg（14%）上回った。

これは、主産地である福井県において、おおむね天候に恵まれ、生育が順調に推移したためである。

なお、10a当たり平均収量対比は103%となった（表2-1、2-2、図2-3）。

図2-3 六条大麦（子実用）の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



(ウ) 収穫量

収穫量は5万9,000tで、前年産に比べ4,900t（9%）増加した（表2-1、2-2、図2-3）。

エ はだか麦（子実用）

(ア) 作付面積

作付面積は5,160haで、前年産に比べ270ha（5％）減少した（表2－1、2－2、図2－4）。

(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は320kgで、前年産を92kg（40％）上回った。

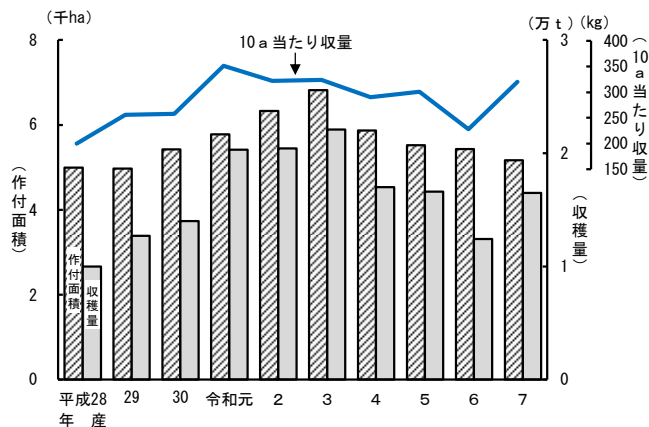
これは、主に四国・九州において、おおむね天候に恵まれ、生育が順調に推移したことから、湿害等で作柄の悪かった前年産を上回ったためである。

なお、10 a 当たり平均収量対比は107％となった（表2－1、2－2、図2－4）。

(ウ) 収穫量

収穫量は1万6,500 t で、前年産に比べ4,100 t （33％）増加した（表2－1、2－2、図2－4）。

図2－4 はだか麦（子実用）の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移（全国）



3 豆類・そば

(1) 要 旨

豆類（乾燥子実）の収穫量は、大豆が26万1,200 tで、前年産に比べ8,800 t（3％）増加した。小豆は4万5,100 tで、前年産に比べ1,600 t（3％）減少した。いんげんは5,430 tで、前年産に比べ220 t（4％）減少した。らっかせいは1万3,400 tで、前年産に比べ1,400 t（9％）減少した。

また、そば（乾燥子実）の収穫量は3万8,200 tで、前年産に比べ2,200 t（5％）減少した（表3）。

表3 令和7年産豆類（乾燥子実）及びそば（乾燥子実）の作付面積、10 a 当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						（ 参 考 ）	
				作 付 面 積		10 a 当たり 収 量		収 穫 量		10 a 当たり 平均収量 対 比	10 a 当たり 平均収量
				対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比		
	ha	kg	t	ha	%	kg	%	t	%	%	kg
大 豆	144,100	181	261,200	△ 9,800	94	17	110	8,800	103	113	160
小 豆	24,200	186	45,100	200	101	△ 9	95	△ 1,600	97	100	186
うち北海道	21,300	206	43,900	500	102	△ 12	94	△ 1,400	97	98	211
い ん げ ん	5,650	96	5,430	0	100	△ 4	96	△ 220	96	86	112
うち北海道	5,290	98	5,180	20	100	△ 4	96	△ 200	96	86	114
らっかせい	5,140	261	13,400	△ 420	92	△ 5	98	△ 1,400	91	105	249
うち千葉	4,220	273	11,500	△ 370	92	△ 5	98	△ 1,300	90	105	259
そ ば	69,100	55	38,200	100	100	△ 4	93	△ 2,200	95	92	60

注：小豆、いんげん及びらっかせいの作付面積調査及び収穫量調査は主産県調査であり、作付面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施している。主産県とは、直近の全国調査年における全国の作付面積のおおむね8割を占めるまでの上位都道府県をいう（以下表5－3まで同じ。）。令和7年産調査については、作付面積調査及び収穫量調査ともに主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の作付面積及び収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

(2) 解 説

ア 大豆（乾燥子実）

(ア) 作付面積

作付面積は14万4,100haで、前年産に比べ9,800ha（6％）減少した（表3、図3－1）。

これは、水稻等への転換や作付中止があったためである。

(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は181kgで、前年産を17kg（10％）上回った。

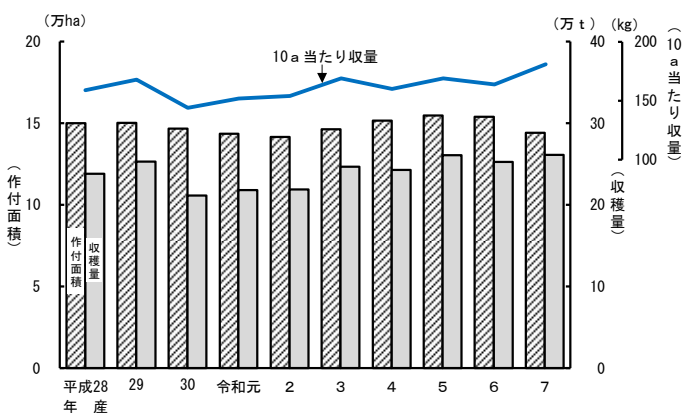
これは、天候に恵まれ生育がおおむね良好であったためである。

なお、10 a 当たり平均収量対比は113％となった（表3、図3－1）。

(ウ) 収穫量

収穫量は26万1,200 t で、前年産に比べ8,800 t （3％）増加した（表3、図3－1）。

図3－1 大豆（乾燥子実）の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移（全国）



イ 小豆（乾燥子実）

(ア) 作付面積

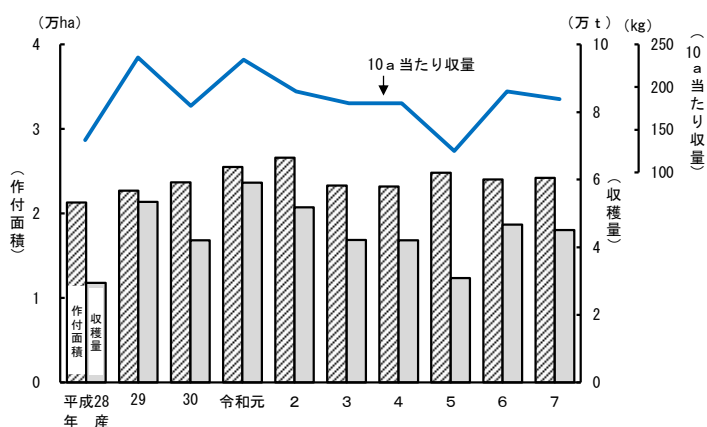
作付面積は2万4,200haで、前年産に比べ200ha（1％）増加した（表3、図3－2）。

(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は186kgで、前年産を9kg（5％）下回った。

なお、10 a 当たり平均収量対比は100％となった（表3、図3－2）。

図3－2 小豆（乾燥子実）の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移（全国）



(ウ) 収穫量

収穫量は4万5,100 t で、前年産に比べ1,600 t （3％）減少した（表3、図3－2）。

ウ いんげん（乾燥子実）

(ア) 作付面積

作付面積は5,650haで、前年産並みとなった（表3、図3-3）。

(イ) 10a 当たり収量

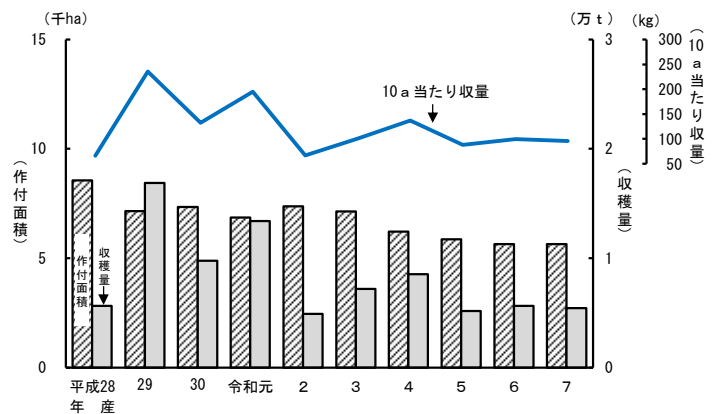
10a 当たり収量は96kgで、前年産を4kg（4％）下回った。

なお、10a 当たり平均収量対比は86％となった。これは、主産地である北海道において、開花後に高温が続いたことにより落花がみられ、着さや数が減少したためである（表3、図3-3）。

(ウ) 収穫量

収穫量は5,430tで、前年産に比べ220t（4％）減少した（表3、図3-3）。

図3-3 いんげん（乾燥子実）の作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）



エ らっかせい（乾燥子実）

(ア) 作付面積

作付面積は5,140haで、前年産に比べ420ha（8％）減少した（表3、図3-4）。

これは、高齢化による労力不足等に伴う作付中止があったためである。

(イ) 10a 当たり収量

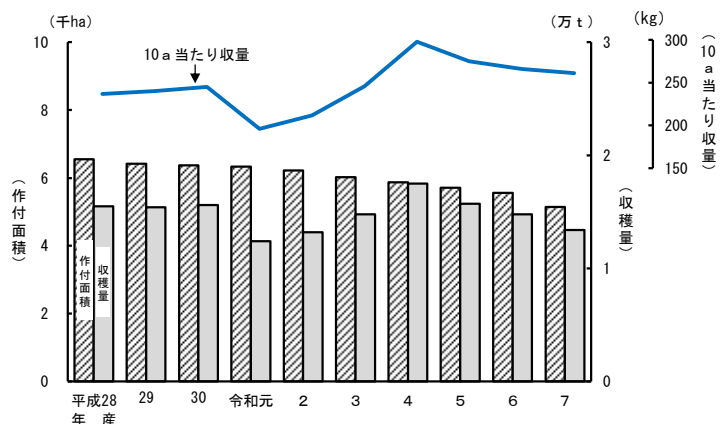
10a 当たり収量は261kgで、前年産を5kg（2％）下回った。

なお、10a 当たり平均収量対比は105％となった（表3、図3-4）。

(ウ) 収穫量

収穫量は1万3,400tで、前年産に比べ1,400t（9％）減少した（表3、図3-4）。

図3-4 らっかせい（乾燥子実）の作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）



オ そば（乾燥子実）

（ア） 作付面積

作付面積は6万9,100haで、前年産並みとなった（表3、図3-5）。

（イ） 10a当たり収量

10a当たり収量は55kgで、前年産を4kg（7%）下回った。

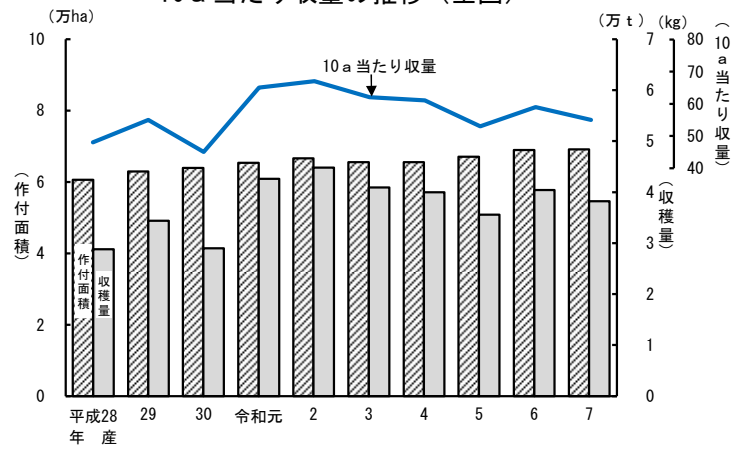
これは、主に東北において収穫期の降雨、北海道において開花期の高温による被害があったためである。

なお、10a当たり平均収量対比は92%となった（表3、図3-5）。

（ウ） 収穫量

収穫量は3万8,200tで、前年産に比べ2,200t（5%）減少した（表3、図3-5）。

図3-5 そば（乾燥子実）の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



4 かんしょ

(1) 作付面積

作付面積は3万1,300haで、前年産に比べ500ha（2％）減少した（表4、図4）。

(2) 10a当たり収量

10a当たり収量は2,230kgで、前年産を20kg（1％）下回った。

なお、10a当たり平均収量対比は104%となった（表4、図4）。

(3) 収穫量

収穫量は69万9,400tで、前年産に比べ1万7,600t（2％）減少した（表4、図4）。

図4 かんしょの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

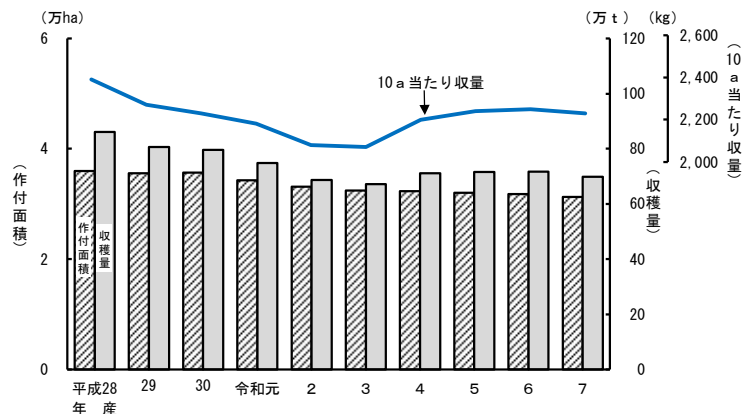


表4 令和7年産かんしょの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作 付 面 積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較								(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当たり 収 量		収 穫 量		対 差	対 比	10 a 当たり 平均収量 対 比	10 a 当たり 平均収量
				対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比				
全 国	ha	kg	t	ha	%	kg	%	t	%			%	kg
	31,300	2,230	699,400	△ 500	98	△ 20	99	△ 17,600	98			104	2,150
うち 茨 城	7,790	2,510	195,500	△ 20	100	△ 40	98	△ 3,700	98			97	2,580
千葉	3,420	2,340	80,000	20	101	△ 110	96	△ 3,300	96			98	2,390
徳 島	1,070	2,370	25,400	0	100	△ 60	98	△ 600	98			95	2,490
熊 本	780	2,270	17,700	△ 30	96	20	101	△ 500	97			101	2,240
宮 崎	3,060	2,270	69,500	△ 120	96	△ 160	93	△ 7,800	90			95	2,400
鹿 児 島	9,240	2,370	219,000	△ 250	97	70	103	700	100			109	2,170

注：かんしょの作付面積調査及び収穫量調査は、作付面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年にあつては、主産県調査を実施している。令和7年産調査については、作付面積調査及び収穫量調査ともに主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の作付面積及び収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

5 飼料作物

(1) 牧草

ア 作付（栽培）面積

作付（栽培）面積は68万6,700haで、前年産に比べ8,800ha（1％）減少した（表5－1、図5－1）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は3,370kgで、前年産を100kg（3％）下回った。

なお、10a当たり平均収量対比は99％となった（表5－1、図5－1）。

ウ 収穫量

収穫量は2,312万4,000tで、前年産に比べ102万4,000t（4％）減少した（表5－1、図5－1）。

図5－1 牧草の作付（栽培）面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

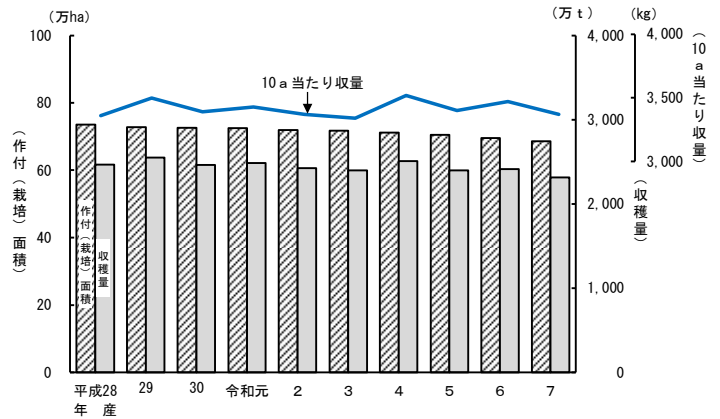


表5－1 令和7年産牧草の作付（栽培）面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作付(栽培)面積	10 a 当たり収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 (栽 培) 面 積		10 a 当たり収 量		収 穫 量		10 a 当たり平均収量対 比	10 a 当たり平均収量
				対 差	対比	対差	対比	対 差	対比		
全 国	ha	kg	t	ha	%	kg	%	t	%	%	kg
	686,700	3,370	23,124,000	△ 8,800	99	△ 100	97	△ 1,024,000	96	99	3,410
う ち 北 海 道	511,700	3,230	16,528,000	△ 3,900	99	△ 110	97	△ 693,000	96	99	3,260

注： 牧草の作付（栽培）面積調査及び収穫量調査は、作付（栽培）面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年にあつては、主産県調査を実施している。主産県とは、直近の全国調査年における全国の作付面積のおおむね8割を占めるまでの上位都道府県及び農業競争力基盤整備事業のうち飼料作物に係るものを実施する都道府県をいう。令和7年産調査については、作付面積調査及び収穫量調査ともに主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の作付面積及び収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

(2) 青刈りとうもろこし

ア 作付面積

作付面積は9万5,100haで、前年産に比べ1,400ha（1％）減少した（表5－2、図5－2）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は5,080kgで、前年産を70kg（1％）下回った。

なお、10a当たり平均収量対比は100％となった（表5－2、図5－2）。

ウ 収穫量

収穫量は483万5,000tで、前年産に比べ13万7,000t（3％）減少した（表5－2、図5－2）。

図5－2 青刈りとうもろこしの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

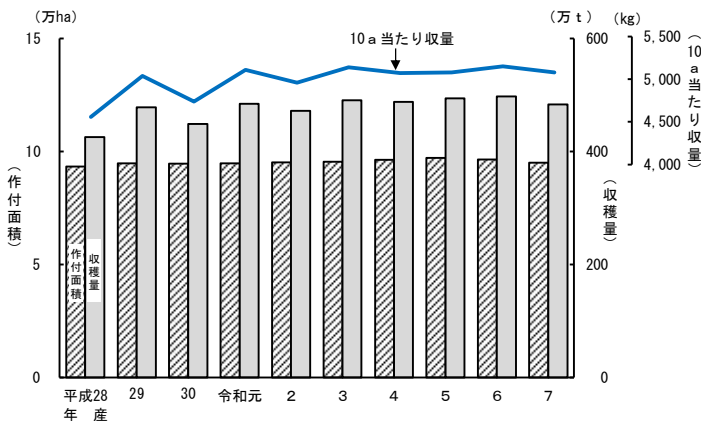


表5－2 令和7年産青刈りとうもろこしの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作 付 面 積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当たり 収 量		収 穫 量		10 a 当たり 平均収量 対 比	10 a 当たり 平均収量
				対 差	対比	対 差	対比	対 差	対比		
全 国	ha 95,100	kg 5,080	t 4,835,000	△ 1,400	99	△ 70	99	△ 137,000	97	% 100	kg 5,070
う ち 北 海 道	60,400	5,440	3,286,000	0	100	△ 120	98	△ 72,000	98	100	5,440

注：青刈りとうもろこしの作付面積調査及び収穫量調査は、作付面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年にあつては、主産県調査を実施している。主産県とは、直近の全国調査年における全国の作付面積のおおむね8割を占めるまでの上位都道府県及び農業競争力基盤整備事業のうち飼料作物に係るものを実施する都道府県をいう。令和7年産調査については、作付面積調査及び収穫量調査ともに主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の作付面積及び収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

(3) ソルゴー

ア 作付面積

作付面積は1万400haで、前年産に比べ、800ha（7％）減少した（表5－3、図5－3）。

これは、作付中止や他作物への転換等があったためである。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は4,230kgで、前年産を360kg（9％）上回った。

これは、主に九州において、おおむね天候に恵まれ、作柄が悪かった前年産を上回ったためである。

なお、10a当たり平均収量対比は101％となった（表5－3、図5－3）。

ウ 収穫量

収穫量は43万9,700tで、前年産に比べ6,400t（1％）増加した（表5－3、図5－3）。

図5－3 ソルゴーの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

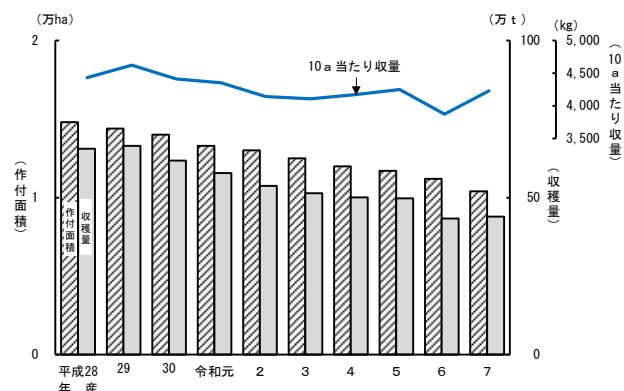


表5－3 令和7年産ソルゴーの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量		収 穫 量		10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	10 a 当 たり 平 均 収 量
				対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比		
全 国	ha	kg	t	ha	%	kg	%	t	%	%	kg
	10,400	4,230	439,700	△ 800	93	360	109	6,400	101	101	4,200

注： ソルゴーの作付面積調査及び収穫量調査は、作付面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年にあつては、主産県調査を実施している。主産県とは、直近の全国調査年における全国の作付面積のおおむね8割を占めるまでの上位都道府県及び農業競争力基盤整備事業のうち飼料作物に係るものを実施する都道府県をいう。令和7年産調査については、作付面積調査及び収穫量調査ともに主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の作付面積及び収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

6 工芸農作物

(1) 茶

ア 栽培面積

全国の栽培面積は3万3,400haで、前年に比べ1,700ha（5％）減少した（表6－1）。

イ 摘採実面積

主産県の摘採実面積は2万5,400haで、前年産に比べ1,300ha（5％）減少した（表6－2）。

ウ 生葉収穫量

主産県の生葉収穫量は31万9,500 tで、前年産並みとなった（表6－2）。

エ 荒茶生産量

主産県の荒茶生産量は6万8,000 tで、前年産に比べ1,100 t（2％）増加した。

府県別にみると、鹿児島県が3万 t（主産県計に占める割合は44％）、次いで静岡県が2万4,100 t（同35％）、三重県が4,860 t（同7％）となっている（表6－2、図6－1）。

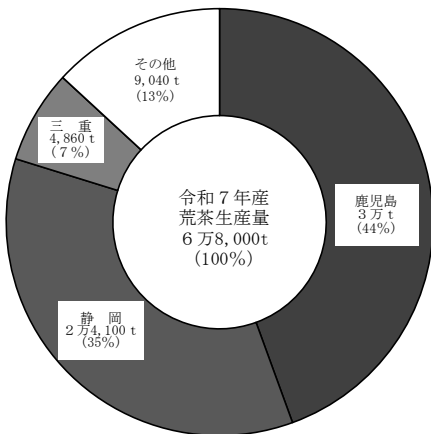
表6－1 茶の栽培面積（全国）

単位：ha

区 分	栽 培 面 積
令和6年	35,100
7	33,400
対前年比（％）	95

注：茶の栽培面積調査については、6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年については、主産県調査を実施している。令和6年及び7年調査については主産県を対象に調査を実施した。なお、主産県は、埼玉県、静岡県、三重県、京都府、福岡県、熊本県、宮崎県及び鹿児島県の8府県である（以下表6－2まで同じ。）。なお、全国値は主産県の調査結果から推計したものである。

図6－1 茶の府県別荒茶生産量及び割合（主産県）



注：割合については、表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない。

表6－2 令和7年産茶の摘採面積、10 a 当たり生葉収量、生葉収穫量及び荒茶生産量（主産県）

区 分	摘 採 面 積		10 a 当 たり 生 葉 収 量		生 葉 収 穫 量		荒 茶 生 産 量	
	実 面 積	延 べ 面 積	一 番 茶		一 番 茶		一 番 茶	
	ha	ha	kg	kg	t	t	t	t
主産県計 令和6年産	26,700	65,700	1,200	484	319,300	129,100	66,900	24,900
7	25,400	65,100	1,260	450	319,500	114,200	68,000	22,200
対前年産比（％）	95	99	105	93	100	88	102	89

注：茶の収穫量調査は、6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年については、主産県調査を実施している。令和7年産調査については主産県を対象に調査を実施した。

(2) なたね（子実用）

ア 作付面積

作付面積は1,590haで、前年産に比べ90ha（5％）減少した（表6－3、図6－2）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は165kgで、前年産を22kg（12％）下回った。

これは、北海道において、融雪後の日照不足及び開花・登熟期間の高温干ばつ傾向により生育の抑制等があったためである。

なお、10a当たり平均収量対比は83％となった（表6－3、図6－2）。

ウ 収穫量

収穫量は2,620tで、前年産に比べ520t（17％）減少した（表6－3、図6－2）。

図6－2 なたね（子実用）の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

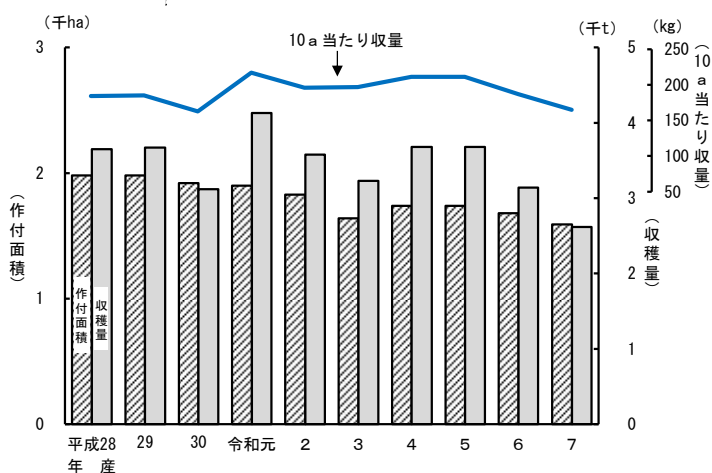


表6－3 令和7年産なたね（子実用）の作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量		収 穫 量		10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	10 a 当 たり 平 均 収 量
				対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比		
	ha	kg	t	ha	%	kg	%	t	%	%	kg
全 国	1,590	165	2,620	△ 90	95	△ 22	88	△ 520	83	83	200

(3) てんさい（北海道）

ア 作付面積

作付面積は4万8,000haで、前年産に比べ900ha（2％）減少した（表6－4、図6－3）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は6,660kgで、前年産を470kg（7％）下回った。

これは、生育の良かった前年産に比べ、高温・少雨により根部の肥大が抑制されたためである。

なお、10a当たり平均収量対比は98％となった（表6－4、図6－3）。

ウ 収穫量

収穫量は319万5,000tで、前年産に比べ29万t（8％）減少した（表6－4、図6－3）。

図6－3 てんさいの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（北海道）

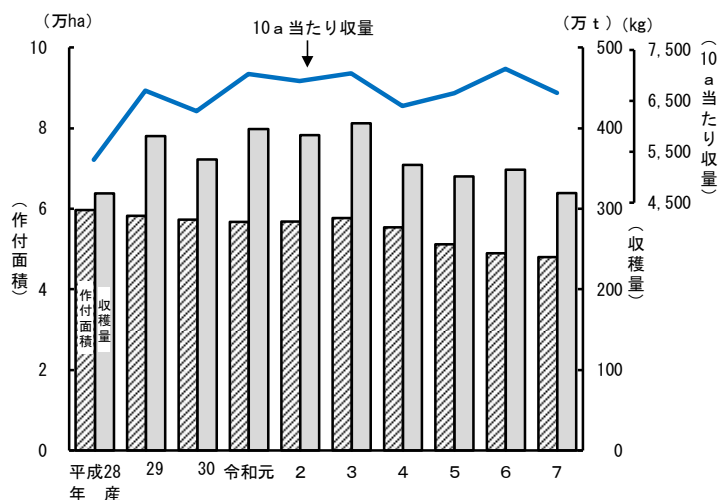


表6－4 令和7年産てんさいの作付面積、10a当たり収量及び収穫量（北海道）

区 分	作付面積	10a 当 た り 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10a 当 た り 収 量		収 穫 量		10a 当 た り 平 均 収 量 対 比	10a 当 た り 平 均 収 量
				対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比		
	ha	kg	t	ha	%	kg	%	t	%	%	kg
北 海 道	48,000	6,660	3,195,000	△ 900	98	△ 470	93	△ 290,000	92	98	6,800

注：てんさいの作付面積調査及び収穫量調査は、北海道を対象に実施した。

(4) さとうきび

ア 収穫面積

収穫面積は2万3,300haで、前年産に比べ200ha（1％）増加した（表6－5、図6－4）。

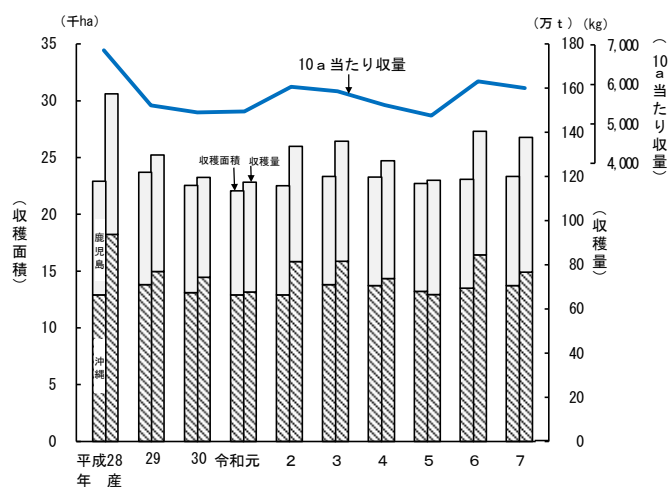
イ 10a当たり収量

10a当たり収量は5,910kgで、前年産を170kg（3％）下回った。

これは、鹿児島県において天候に恵まれ作柄が良好であったものの、沖縄県において少雨等の影響で生育が停滞し、作柄の良かった前年産を下回ったためである。

なお、10a当たり平均収量対比は106％となった（表6－5、図6－4）。

図6－4 さとうきびの収穫面積、収穫量及び10a当たり収量の推移



ウ 収穫量

収穫量は137万7,000tで、前年産に比べ2万8,000t（2％）減少した（表6－5、図6－4）。

表6－5 令和7年産さとうきびの栽培面積、作型別収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	栽培面積	収 穫 面 積				10 a 当 た り 収 量			
		計	夏 植 え	春 植 え	株 出 し	計	夏 植 え	春 植 え	株 出 し
	ha	ha	ha	ha	ha	kg	kg	kg	kg
全 国	27,000	23,300	3,300	2,610	17,400	5,910	7,270	5,830	5,660
鹿 児 島	10,800	9,630	808	1,370	7,450	6,350	7,870	6,390	6,180
沖 縄	16,300	13,700	2,490	1,240	9,920	5,590	7,080	5,200	5,290

区 分	収 穫 量				前 年 産 と の 比 較				(参 考)	
	計	夏 植 え	春 植 え	株 出 し	栽培面積	収穫面積	10a当たり収	収 穫 量	10a当たり平均収量対	10a当たり平均収量
	t	t	t	t	%	%	%	%	%	kg
全 国	1,377,000	239,800	152,200	985,400	100	101	97	98	106	5,570
鹿 児 島	611,500	63,600	87,700	460,300	102	101	109	109	115	5,520
沖 縄	765,800	176,200	64,500	525,100	99	101	89	91	98	5,690

注：さとうきびの収穫面積調査及び収穫量調査は、鹿児島県及び沖縄県を対象に実施した。

(5) こんにゃくいも

ア 栽培面積・収穫面積

栽培面積は2,590haで、前年産に比べ320ha（11％）減少した。

これは、前年産までの価格低迷により、主産地である群馬県において、作付中止や他の作物への転換等があったためである。

また、収穫面積は1,670haで、前年産に比べ200ha（11％）減少した（表6－6、図6－5）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は2,310kgで、前年産を440kg（16％）下回った。

これは、主産地である群馬県において、6月から9月にかけての高温・乾燥により生育期に球茎の肥大が抑制されたためである。

なお、10a当たり平均収量対比は88％となった（表6－6、図6－5）。

ウ 収穫量

収穫量は3万8,500tで、前年産に比べ1万2,900t（25％）減少した（表6－6、図6－5）。

図6－5 こんにゃくいもの収穫面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

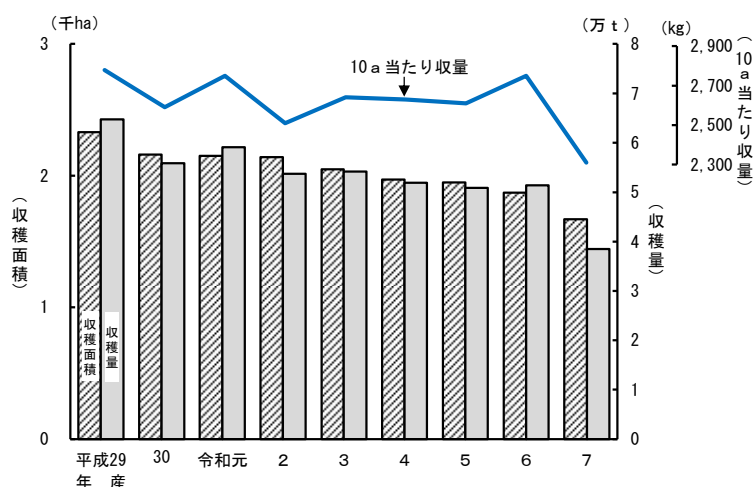


表6－6 令和7年産こんにゃくいもの栽培・収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	栽培面積 ha	収穫面積 ha	10a 当たり 収 量 kg	収 穫 量 t	前年産との比較								(参考)	
					栽培面積		収穫面積		10a当たり 収 量		収 穫 量		10a 当たり 平均 収 量 対 比	10a 当たり 平均 収 量
					対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比	対 比	kg
全 国	2,590	1,670	2,310	38,500	△ 320	89	△ 200	89	△ 440	84	△ 12,900	75	88	2,640
うち 群馬	2,400	1,540	2,400	37,000	△ 290	89	△ 210	88	△ 440	85	△ 12,700	74	88	2,740

注：こんにゃくいもの作付面積調査及び収穫量調査は、作付面積調査は3年周期、収穫量調査は6年周期で全国調査を実施しており、全国調査以外の年にあっては、群馬県を対象に調査を実施している。令和7年産調査については、作付面積調査及び収穫量調査ともに主産県を対象に調査を実施した。なお、全国の作付面積及び収穫量については、主産県の調査結果から推計したものである。

(6) い（熊本県）

ア 作付面積

作付面積は242haで、前年産に比べ77ha（24％）減少した。

これは、高齢化による労力不足、生産コストの高騰に伴う作付中止などがあったためである（表6－7、図6－6）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は1,500kgで、前年産を60kg（4％）下回った。

なお、10a当たり平均収量対比は100％となった（表6－7、図6－6）。

ウ 収穫量

収穫量は3,630tで、前年産に比べ1,350t（27％）減少した（表6－7、図6－6）。

エ い生産農家数、畳表生産農家数及び畳表生産量

「い」の生産農家数は223戸で、前年産に比べ43戸（16％）減少した。

このうち、畳表の生産まで一貫して行っている畳表生産農家数は221戸で、前年に比べ43戸（16％）減少した。

なお、令和6年7月から令和7年6月までの畳表生産量は103万枚で、前年に比べ38万枚（27％）減少した（表6－7）。

図6－6 「い」の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（熊本県）

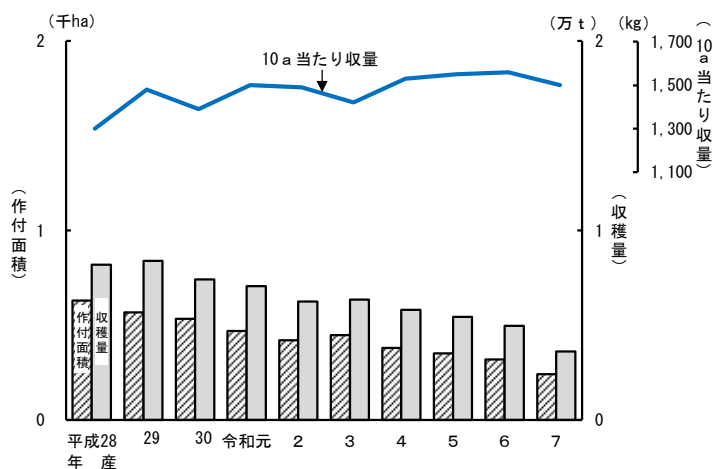


表6－7 令和7年産「い」の作付面積、10a当たり収量、収穫量等（熊本県）

区 分	い 生 産 農 家 数	作付面積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)		畳表生産 農 家 数	畳 表 生 産 量
					作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量		収 穫 量		10 a 当たり 平均収量 対 比	10 a 当たり 平均収量		
					対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比				
熊 本	戸 223	ha 242	kg 1,500	t 3,630	ha △ 77	% 76	kg △ 60	% 96	t △ 1,350	% 73	% 100	kg 1,500	戸 221	千枚 1,030

注：1 「い」の調査は、熊本県を対象に実施した。

2 い生産農家数は、令和7年産の「い」の生産を行った農家の数である。

3 畳表生産農家数は、「い」の生産から畳表の生産まで一貫して行っている農家で、令和6年7月から令和7年6月までに畳表の生産を行った農家の数である。

4 畳表生産量は、畳表生産農家によって令和6年7月から令和7年6月までに生産されたものである。